

教学半也

令和7年11月14日

No.14

日々、人権教育を行う
全ての先生方へ

第2回 学校人権教育連絡協議会【南信地区】

相手とのちがいを当たり前前に受け入れるために

「学校における人権教育のあり方について理解と認識を深め、また、校種間相互の連携を進めることによって、教職員の人権意識の高揚と学校における人権教育の充実を図る」ことをねらいとし、上伊那地区と諏訪地区において、第2回 学校人権教育連絡協議会が行われました。今年度は、両地区とも高等学校の授業公開が行われました。小中学校の先生方にとって見る機会が少ない高等学校の授業における生徒たちの学びの姿から、校種間相互の連携について考え合う場となりました。両会場の様子と参加者の感想をお伝えします。

【伊那北高等学校】6月12日（木）

養護教諭の先生のご経験を基に語られた「性的同意」についてのお話や、具体的な場面を想定した生徒同士が関わり合うワークショップを通して、自分も相手も大切にすることについて考え合う授業でした。

【参加者の感想より】

生徒たちが、これから近いうちに訪れるであろう「性的同意」の場面について、身近な事柄を入り口として、ワークや対話等の活動が、生徒の実態に即した内容だと感じました。ノーは相手を大切にすること、自分を否定されている訳ではないという考えは、大人である私も胸に落ちました。



【下諏訪向陽高等学校】10月16日（木）

先天性心疾患を患っている猪俣さんと筋ジストロフィーを患っている井出さんの当事者としての思いや願いを語られた講演や、生徒同士が語り合うケーススタディを通して、すべての人が自分らしく生きられる社会について考えていく授業でした。

【参加者の感想より】

講師の方の「障がい者の話をするために来た訳ではないよ」という言葉が心に刺さりました。見た目で判断しない、自分も含めて人をカテゴライズしない、人と比べることで「自分らしさ」がわかる等、お二人から聞くからこそ、実感できたのではないのでしょうか。いろいろな特徴がある人と出会うことが大人も子供も大事だと改めて感じました。



下諏訪向陽高校で講師を務められた猪俣さんから、参加した先生方に向けて「多様性の経験値を上げる」必要性を伝えられました。それを受け「保育園の頃から車椅子に乗っている人やダウン症を患っている人と関わった経験をもつ子供たちは、小学校の中でも、自分とは特徴の異なる友達とも当たり前に関わって生活している」と語られている先生がいらっしゃいました。まさに多様性の経験が生きている場面だと感じました。

これから社会に出て、様々な方々と関わる子供たちです。子供たちも、私たち大人も、相手とのちがいを当たり前前に受け入れられるように、いろいろな特徴がある方々のことを知ったり、出会ったりする機会を大事にしていきましょう。